

霧の中の夢の

小林明子

* 登場人物

田川トミハル(17) 高校2年生
田川シュウイチ(50) 土産物店の経営者
トミハルの父
田川ヤスカ(24) 薬剤師・トミハルの姉
菅野ウララ(77) トミハルの祖母
川本ミキ(17) トミハルの友人
川本コウゾウ(49) ミキの父・医者
川本ユウコ(45) ミキの母
川本コウスケ(20) ミキの兄
沼田ハジメ(51) 田川の友人
河田マサミ(18) 演劇部部长
沖田タケシ(17) 演劇部員
谷川ユミコ(16) 演劇部員

* あらすじ

田川トミハルは釧路の高校生。同じ高校の川本ミキから女優になりたい、という夢を打ち明けられ、東京の劇団の入団テストを受けるために家出をするから、一緒についてきてほしいと頼まれる。

トミハルの父はアイヌの工芸品などを扱う土産物店を経営しているが、商店街は寂れている。父はトミハルに店を継いでほしいと思っているがトミハルは迷っていた。

トミハルはミキに好意を持っていたこともあって、一緒に早朝の釧路駅から汽車に乗ろうとするが、ミキの家族に捕まってしまう。

そのころ、商店街の空き店舗から不審火が出て父の店も火災にあうが、父は火の中に飛び込んで亡き妻(トミハルの母)の遺品であるアイヌの晴れ着を持ち出す。

トミハルは父の命がけの好意を見て、自分が必要なことを知る。

複数の走っている足音。
それに重なって「はっ、はっ」と荒い
息遣い。

トミハル「大丈夫か」
ミキ「うん」

走る足音に重なって、遠くで追うよう
に走る足音。

トミハル「見つかった!」
ミキ「こっち」

走る足音。

それに重なって、複数の若い男女の声
「ア、エ、イ、ウ、エ、オ、ア、オ」
「カ、ケ、キ、ク、ケ、コ、カ、コ」
走る足音次第に消えて、声大きくなっ
ていく。

「サ、セ、シ、ス、セ、ソ、サ、ソ」

高校演劇部のミーティング。

マサミ「で、今日までに高文連のアイディア
を最低一人ひとつは考えて来るって約束、
皆覚えているよね。これから一人づつ発表し
てもらいます。まずはタケシ!」

タケシ「(意外だという風に)俺から?」
マサミ「そ、言って」

タケシ「俺はあ、先生に反抗する生徒の話は
どうかかって」

マサミ「うん、それで?」
タケシ「それでって、それなんだけど」

マサミ「先生に反抗した生徒が先生を傷つけ
てしまうとか?」

タケシ「(困って)だからあ、ただ、先生に
思い切り反抗する生徒なんていたら、お
もしろいかなって思っただけなんだ」

マサミ「わかった。アイディアとしては悪く
ないと思うよ。じゃあ次、ユミコは?」

ユミコ「私は、携帯電話が絡んだ恋愛物はど
うかなって思いました。今風に」

マサミ「どんな風に展開するの?」
ユミコ「カッコいい男の子が、メールを自分
の彼女に送ったつもりが、間違つて別の
女の子の携帯に届いてみたいな」

タケシ「その女の子がえらいブスでえ」
ユミコ「(怒って)ちやかさないでください」

マサミ「タケシの言うのもおもしろいかも。
で?」

ユミコ「私もここまでなんですけど」
マサミ「わかった。次はトミハル」

トミハル「・・・俺は・・・」
マサミ「考えてこなかったの?」

トミハル「・・・俺は、アイヌの話なんてど
うかと・・・」

タケシ「アイヌ?」
マサミ「そんな話?」

トミハル「たいした話じゃないんだけど、釧
路川にかかっている幣舞橋の初代は愛北橋
って言って民間の会社で作ったんだけど、
愛北橋ができる前は渡し船で釧路川を渡
ってた。それで、渡し船はアイヌが渡し

てたこともあったから、アイヌと和人の
交流もあったんじゃないかと・・・」
ユミコ「和人って日本人のことですよね」
トミハル「うん」
マサミ「昔の北海道のアイヌの人と和人の交
流をとりあげようってこと?」
トミハル「交流っていうか・・・」
タケシ「なんでいまどきアイヌなの?今はも
うアイヌも和人もないんじゃないの?」
トミハル「そうなんだけど・・・そうじゃな
くて・・・」
ユミコ「アイヌの女の人と和人の男の人の恋
物語とか?」
トミハル「まあ、そんなことも・・・」
タケシ「なんか古すぎないか」
マサミ「ミキはどう思う?」
ミキ「あたしは、よくわかんないけど、ちょ
っと興味あるかな」
タケシ「アイヌの話に?それともトミハル
に?」
ミキ「なにそれ」
トミハル「なし、なし!今の話なし。古すぎ
るな、確かに。忘れて。次、どうぞ!」

今流行の軽快な音楽(ヒップポップな
ど)急に大きく。
音楽、突然途切れる。
帰宅途中の車で。
トミハル「怒っているが、動揺もしていて」

なんだよ、ちぎれるだろ」

ミキ「なんべん呼んでも無視するから」

トミハル「(怒っている振り)聞こえなかつたんだよ」

ミキ「あの話の続き聞かせて」

トミハル「あの話って？」

ミキ「アイヌの」

トミハル「忘れた」

ミキ「田川君のおばあちゃんてアイヌの人なんだでしょ？お母さんのお母さんだよ」

アイヌの話はお母さんから聞いたの？」

トミハル「母さんの記憶はないよ。俺が三つの時に死んだから」

ミキ「あ、そうだったね。ごめん。じゃあ、おばあちゃんから聞いたの？」

トミハル「忘れたよ。(あわてて)お、おい返せよ」

ミキ「ふうん。こんなの聞いてたんだ」

トミハル「返せって」

ミキ「教えてくれたら返す」

トミハル「(棒読みのように)アイヌの娘が和人の男を好きになって川に飛び込みました、ざぶん！はい終わり」

ミキ「悲しいお話なんだね」

トミハル「・・・もう、いいだろう」

自転車がベルを鳴らして通りすぎる

ミキ「田川君さ、去年の高文連で道具の手伝いに引っ張られてきて、手伝いが終わったらやめるのかと思ってたけど、残ってたね。どうして？」

トミハル「なんとなく、ずるずるといるだけ」

ミキ「演劇、好き？」

トミハル「・・・どうかな」

ミキ「あたしね、女優になりたいんだ」

トミハル「え」

ミキ「笑った」

トミハル「いや」

ミキ「あ、あたし、こっちの道だから。返すね」

再び軽快な音楽。

音に重なって

ミキ「ねえ！」

音楽止まる

ミキ「あのアイヌの娘の役、やってみたかった」

トミハル「・・・」

横断歩道の青信号(ピヨピヨなど)

ぎしぎしと船をこぐ音が遠くから次第に近づいてくる。

船に当たる波の音、かすかに。

若いアイヌの娘「新之助さま」

どぶんと水に飛び込む音。

船に当たる波の音、たふたふと。

やがてその音がしなくなると、遠くかすかに娘の声「新之助さま」

カランカランと木製のドアベルの音。

田川「いらつしやーあ、トミハルか。遅かったな」

沼田「おう、久しぶりだな」

トミハル「(無愛想に)こんにちは」

沼田「また、背え伸びたか」

トミハル「まあ」

沼田「男らしくなってきたな。(田川に)頼もしい跡取りでうらやましいよ」

田川「まんざらでもなくどうなんだか」

沼田「じゃ、そういうことで土曜日よろしく」

田川「ありがとう」

沼田、出て行く。再び木製のドアベルの音。

田川「そこにおいてあるダンボール箱、こっちに持って来てくれ」

トミハル、持ち損ねて大きな音をたてる

田川「もっと丁寧に扱え！壊れたらどうする」

トミハル「(小さく舌打ち)ちっ」

田川「持って来たならその棚の置物と入れ替えてくれ」

トミハル「(ダンボール箱を開けながら)また講習会するの？」

田川「ああ。(嬉しさを押し殺しながら)道東新聞のカルチャー教室でアイヌ文化をとりあげてくれることになって、講師で呼ばれることになった」

トミハル「人は集まるのか」

田川「何人でもかまわない。一人でも聞いてくれる人がいればいいんだ」

トミハル「(小さくため息をついて)隣のラーメン屋、閉店するみたいだね」

田川「空いたダンボールはいつものところに片付けといてくれ」

トミハル「今日はお客、何人来たの?」

田川「数え切れないだけ来た」

トミハル「(小さく)うそつけ」

田川「今日は少し、帳簿のつけ方を教えるか」

トミハル「父さん、ここの商店街はもうだめだよ。父さんだってわかってるんだろう?人の流れが変わってしまったし、こんなにあちこち空き店舗があつて古臭くて、誰も来たいと思わないよ。だいたい今時、こんなアイヌの晴れ着だの木彫りの熊だのぼっかりおいてる土産物屋なんて流行らないよ」

田川「その木彫りの熊には魂がこもってる。ただの置物じゃない」

トミハル「だったらなおさら気味が悪いよ」

田川「・・・店を継ぎたくないのか」

トミハル「父さんは、ただ母さんの思い出に浸っていただけだって姉ちゃんが言っていたけど、わかる気がする。父さんは――」

田川「・・・わかってないな」

トミハル「父さんこそわかってないよ。こんなところにしがみついてなんになるんだ

よ」

田川「今のお前に理解しろと言う方が無理なかもしれない。ここはもういい、家に帰れ」

トミハル「・・・」

トミハル、出て行く。

木製のドアベル、カラカラと鳴る

携帯電話の呼び出し音。

トミハル「(寝ぼけた声で)もしもし」

ミキ(電話の声)「寝てた?」

トミハル「い、いや」

ミキ(電話の声)「あたし、東京へ行こうと思

うんだ」

トミハル「え」

ミキ(電話の声)「今、ネットで調べてたら、あの吉井ひで子のいる劇団で入団テスト

するって出てたんだよ、あたし、あの人があこがれてんだあ。同じ劇団に入れるか

も知れないんだよ、絶対行きたい」

トミハル「・・・」

ミキ(電話の声)「聞いてんの?」

トミハル「ああ」

ミキ(電話の声)「入団テスト受けに行こうと思

うんだ」

トミハル「(動揺を隠して)ふうん」

ミキ(電話の声)「田川君は?」

トミハル「(あわてて)お、俺はそんない」

ミキ(電話の声)「あたしは絶対行く」

トミハル「いつ?」

ミキ(電話の声)「今度の日曜」

トミハル「親には話したの?」

ミキ(電話の声)「話すわけないじゃん。絶対

反対されるもん。黙って行く」

トミハル「俺には話してるじゃないか」

ミキ(電話の声)「・・・一緒に行ってくれない?」

トミハル「はあ?」

ミキ(電話の声)「いや?」

トミハル「(狼狽して)いやとかじゃなくて」

ミキ「朝一番の汽車で札幌へ出て、乗り換え

て上野まで行ったらどうかな」

トミハル「川本、本気で」

ミキ「お金なら大丈夫。あたし、結構持つてるんだ、小遣いためてあるから」

トミハル「そういうことじゃなくて、俺は男

だぞ」

ミキ「(笑って)わかってるよ」

トミハル「どうなっても知らないぞ」

ミキ「どうって?」

トミハル「だから、そんない」

ミキ「いいよ」

トミハル「いいよってー」

ミキ「いやだったら頼まないよ」

トミハル「・・・」

ミキ「日曜の朝だよ。忘れないでよ」

出んわ切れる。

トミハル「(あわてて)ミキ!」

電話機から通話が切れている音。

走っている足音。
荒い息遣い。

駅のアナウンスが聞こえる。

ミキ「(息を切らしながら)ここでつかまりたくないよ」

トミハル「だから、ちゃんと話せて言ったのに」

ミキ「なんとか汽車に乗ってしまえば。あつち曲がろう」

走る

ミキ「はっ」

と、息を飲んで立ち止まる

ケイスケ「ミキになにした！」

トミハル「え？」

ケイスケ「てめえ、ミキに何したって聞いてんだ！」

もみ合う音。

ミキ「やめて、お兄ちゃん」

トミハル「(息が苦しく)んぐぐ」

ケイスケ「なんとか言え！」

トミハル「んぐぐ」

ごつごつと殴る音。

ミキ「やめて、やめて」

走って近づいて来る複数の足音。

ドサツと倒れる音。

ミキ「田川君！」

トミハルの家
タオルを絞る音

トミハル「いつ(痛い)」

ウララ「ひどいたんこぶだねえ。せっかくの男前が台無しだ。あ、これ、もう少し寝てなさい。ちゃんと冷やした方が早く楽になるから」

ごもごもどくぐもつた話し声が聞こえる

隣

トミハル「ばあちゃん、誰か来てるの？」

ウララ「川本さんって言ったかな」

トミハル「・・・ミキの・・・」

隣の部屋

はつきりした話し声になる

川本「トミハル君には本当に申し訳ないことをしました」

ユミコ「普段はあんな乱暴する子じゃないんですが、ミキのことになると時々分別がつかなくなると言いますか・・・」

田川「妹想いのいいお兄さんじゃないですか」

川本「ミキの話だと、二人の間には、そのおなんと言いますか・・・なにもなかったとか。あの子の言うこと信じてやろうと思えます」

ユミコ「あの子も、ちゃんと話してくれたら東京に行くことも考えてあげたのに。なんとというか、反対を押し切るような形で家を出てみたかったんでしょね」

川本「トミハル君にはとんだとばつちりを食わせてしまった」

田川「あいつもまんざらじゃなかったでしょう、かわいい女の子に頼りにされて」

川本「どうぞ、念のために脳神経外科に早く見てもらってください。私の知り合いのところ

に連絡入れておきますから」

田川「いやあ、あいつは石頭だから大丈夫ですよ」

川本「失礼ですが、支払いは私の方に請求するように言っておきますから」

田川「(きつぱりと)それは結構です。貧乏してませんが、それくらいは払えますから、ご心配無用です」

川本「そのような意味で言ったのではないんです。私はただ、トミハル君に申し訳ない

ので」

田川「済んだことですから。申し訳ないですが、私もそろそろ店に戻らないといけないので」

話し声は続いているが、再びごもごもどくぐもつた声になる

トミハルが寝ている隣の部屋
ふすまが開く音

ヤスカ「やられたなあ」

トミハル「うるせえ」

ヤスカ「情けないなあ、やられっぱなしかい」

トミハル「あっち行け」

ヤスカ「おばあちゃん、はい、おやき買っ来た」

ウララ「あらま、ありがとう。お茶入れようかね」

ヤスカ「あんたも食べる？」

トミハル「後で食う」

ヤスカ「口の中も切れてんでしょ？」

トミハル「・・・」

ヤスカ「(もぐもぐとおやきを食べながら)今来てるの、殴った奴の親でしょ？うーん

と慰謝料取ってやればいいんだよ」

トミハル「あっち行けって」

ヤスカ「(お茶飲んで)あたし、転勤になったよ、おばあちゃん」

ウララ「転勤？」

ふすまが開く

田川入ってくる

田川「これ、後で返しておいてくれ」

トミハル「なに？」

田川「見舞いだそうだ。無理やり置いて帰った」

ヤスカ「もらっておいたらいいんじゃないの？」

田川「今日は仕事休みか？」

ヤスカ「あたし、転勤になったから。今月の末に札幌行くんで」

田川「・・・そうか」

ヤスカ「お父さんもいつまでもこんあ寂れるばつかりの街にいないで、他に目を向けたら？」

田川「トミハル、まだ痛むのか」

トミハル「少しね」

ヤスカ「お父さんはもとはエリート商社マンだったんでしょ。なんであんなつぶれか

かった土産物屋にこだわってんのか理解できないよ」

田川「わからない奴にはわかってもらわなくていい。お前はお前で好きにしろ」

と、出て行く。

ふすまがぴしやりと閉まる。

ヤスカ「(ため息まじりに)頑固おやじ」

ガチャンと瀬戸物が割れる音

ヤスカ「おばあちゃん、大丈夫？」

ウララ「急須を割ってしまったよ」

ヤスカ「前からひびが入っていたもんね」

ウララ「長い間、ありがとう」

ヤスカ「おばあちゃん、いつも物をなげるとき、お礼言うね」

ウララ「どんな物にもカムイ(神様)がいるからね。この急須も人間の役に立つように、カムイが作ってくれたものだからね、お礼を言うんだよ」

ヤスカ「・・・」

パチパチと物が燃える音

ヤスカ「トミハル、ウララばあちゃんを頼むよ」

トミハル「勝手なこと言うな、自分はさつきとここ出て行くくせに」

ヤスカ「あんたも勉強しな。ちゃらちゃら演劇なんてやってないで、勉強していい成

績とるんだよ。そうすれば人が認めてくれる。それが武器になるんだよ」

トミハル「武器なんていらねえよ」

ヤスカ「バカだね、やりたいことやるためには必要なんだよ。なんでも結果なんだ。あたしが今度札幌の本店に行くことになったのは、こっちの店で薬剤師としての仕事ぶりを認められたからなんだ。いつかあたしは、自分で薬局店を持つんだ」

トミハル「好きにすれば」

ヤスカ「トミハル、あんたも、こんなところにくすぶって、傾いた土産物屋の店主で終わるつもり？」

ウララ「お父さんのこと悪く言っちゃいけない。カムイが守ってくれなくなるよ」

ヤスカ「・・・」

ウララ「あの店は、お前たちのお母さんとお父さんがようやく開いた店なんだよ。お父さんが守っているものをわかってやって欲しいよ。アイヌの教えにこういうのがあるんだよ。人はそれぞれにやりたいことがあるだろうけど、その前に、人は人としてやるべきことがある・・・若いとき、そう教えられたよ」

ゴーゴーと激しく燃える炎の音

電話のベル

田川「はいーそうですーえっ、そんな」

激しい炎の音

人々のざわめく音

消防隊員が消火作業をしている(消化ホースを準備するなど)

消防士「下がって、下がって、危ないから」

「子供の火遊びらしいよ」

「空き店舗でタバコ吸ってるってこ見た人がいるらしいよ」

などのやじ馬の声

消防士「ちよつとあんた、もつと下がって」

田川「燃える、燃えてしまふ」

トミハル「お父さん、だめだよ。危ない」

ヤスカ「お父さん、やめて」

トミハル「助けてください、父が中に！火の中に！」

炎の音がひととき大きくなる

静寂

病院

ヤスカ「よく寝てる」

沼田「無茶するよ、田川さんも。だけど、よく助かったよ」

ヤスカ「お医者さんも驚いてました。よくこれだけのやけどで済んだって」

沼田「田川さんが持って出たのはそれかい？」

トミハル「ほとんど焼けていません」

沼田「ヨシエさんがつくったアイヌの晴れ着だね。ヨシエさんは器用だったからどれもすばらしい晴れ着を作ったけど、それは特に手の込んだ刺繍だな」

トミハル「父が特にこれを気に入っていたのは知っていたけど、なにもあの火の中に飛び込んでいなくても・・・」

沼田「田川さんが守りたかったのは単にそれがヨシエさんの遺品だからというわけじゃないと思うよ。その晴れ着を作っていたところはヨシエさんの残された時間が少ないことがわかっていたんだ。ヨシエさんがアイヌの心を精一杯込めて作り上げた晴れ着だからどうしても守りたかったんだろう」

静寂のなかに医療機器の電子音

(ピ、ピ、ピ・・・)

高校のグラウンドの隅

ミキ「親がね、東京に行くことを許してくれただ」

遠くで運動部が練習している声
(野球部など)

ミキ「応援するから、好きなようにやってごらん、なんていうんだよ。なんか拍子抜けしちゃって」

トミハル「・・・よかったじゃん」

ミキ「とりあえず劇団のテストを受けてみてもし受かったら、そのまま東京に残るか

もしれない」

トミハル「・・・そう」

ミキ「田川君はどうするの？」

トミハル「・・・俺はここに残る」

ミキ「お父さんのこと心配だもんね」

トミハル「それもあるけど、俺はここで俺のやらなきゃならないことがあるから・・・」

ミキ「うんーじゃあー」

と行きかける

トミハル「ミキ、あ、川本」

ミキ「ん？」

トミハル「あの話さ、アイヌの娘が川に飛び込む話」

ミキ「うん？」

トミハル「あれは娘が和人の男と結ばれないのを悲しんで死のうとしたんじゃないんだ。川のカムイに頼みに行くために飛び込んだんだ。生まれ変わったら今度は一緒に幸せになれるようにって」

ミキ「川のカムイ？」

トミハル「川でも山でもどこにでもカムイがいて人を守ってくれているーアイヌはそう思っているんだ」

静かに船をこぐ音

水に飛び込む音

舟に波が当たる音

遠くにかすかに娘の歌声
カムイにささげるアイヌの歌

携帯電話の呼び出し音

トミハル「はいー」

相手の声は聞こえないが、駅員のアナウンスなど駅の騒音が電話から聞こえる

トミハル「ミキ?」

ミキ(電話の声)「今、駅にいるんだ」

トミハル「うん」

ミキ(電話の声)「もう少しで出発するんだ」

トミハル「うん」

ミキ(電話の声)「(震える声で)あたし、こわいよ(泣き声になる)」

トミハル「・・・川のカムイの話、したろう?ミキの周りにもカムイがいて守っ

ていてくれている。心配ないよ。今だつて、ミキのそばにいるんだよ」

ミキ(電話の声)「うん。ー」

トミハル「がんばって来いよ」

ミキ(電話の声)「ありがとう、行くね」

電話、切れると同時に

トミハル「ミキ!」

電話が切れた音

トミハル「俺も、そばにいるよ」

汽車が出発する音、大きく

その音が消えて、遠くアイヌの歌声

おわり